

感謝

大谷 祥之

私は去年の夏、外務省が主催する架け橋プロジェクトで日本に行く機会を頂きました。ホームステイ先は栃木県で、日本の田舎は私の想像をはるかに超えるものでした。コンビニまで歩いて数キロ、見渡す限り田んぼだらけ。Wi-Fiも飛んでいません。しかし、私はそんなところで素晴らしい経験をさせてもらうことができたのです。

私は後藤さんというホストファミリーにお世話になりました。ご家族の方々は皆朗らかな人ばかりで、私の緊張はすぐに解けました。色々な場所に連れて行ってもらい、畑でとれた新鮮な野菜を使った美味しい食事も感動的でした。

ホームステイの最終日の話をします。私は朝早くに起き、後藤さんの畑仕事を手伝いました。手伝ったといっても畑の中には実際には入らず、畑で収穫した野菜をプラスチックの袋に入れ、バーコードの入ったステッカーを張り、近くのお店に運ぶ仕事です。お店にはたくさんの種類の野菜が

あり、どれも近くの畑でとれた新鮮なものばかり、  
と自慢げに後藤さんが言、ておられました。  
そしてその夜、夕食が終わ、て皆で話をしてい  
た時のこと、後藤さんが分厚いアルバムを持、て  
こられました。その中には若い後藤さんがイタリ  
アに出張に行、た時の写真がたくさんあり、その  
話をきかせてもらいました。その時、ある家族に  
お世話にな、たといいます。その家族はイタリア  
語を全く話せない後藤さんにととても親切で、優し  
く接してくれたそうです。言葉という分厚い壁は  
すぐになくなり、とても充満した日々を送れたと  
一生懸命話してくださいました。  
後藤さんがニニ栃木県でホームステイの受け入  
れを始めたのもそれかき、かけのようです。お世  
話にな、た家族のように外国からくる人たちを温  
かく迎えたそうです。私は後藤さんが嬉しそう  
に話されているのを今でもよく覚えています。  
イタリアの話が終わ、たときにこれだけは覚え  
て帰、てほしいと後藤さんから言われた言葉があ  
ります。「ありがとうと言う時は、必ず『どうも

ありがとう』ということ。そうすれば相手は本当に感謝しているんだなと思うから。そして『さようなら』より『い、てきます』を使うこと。そうすればもう一度会えるから。だからいつかまた栃木に戻ってきておじさんに元気な顔見せてくれ。』と、そう言われました。温かいものが私の心に流れ込みました。この言葉は彼がイタリアでお世話にな、た人たちから教えてもら、たそうで、ホームステイで来た人たち全員に伝えてい、ることも言われていました。

そんな熱い後藤さんは私が東京に帰る日も、ホテルまでわざわざ見送りに来てくれました。そのうえお土産も持、てきてくださいました。檜で作られた一合枥です。大人にな、て栃木県に戻、てきたら一緒にお酒を飲もうと笑、て送、てくださ、たのです。後藤さんのおもてなしの心に私は感動しました。

私は日本に行く前、ホームステイがこんなに楽しいものとは全く思、ていませんでした。しかし後藤さんは赤の他人の私を温かく受け入れてくだ

さり、息子のようにな可愛か、てくれました。思いやる心があれば誰とでも、国籍が違、ても、歳が離れていても仲良くなれることを私に教えてくれたのです。本当に心の広い、栃木県の大地そのものののような大きい人でした。

私はこのホームステイで第二の家族と出会うことができしました。そして後藤さんは私の目標でもあります。いつか私もホームステイのホストになり、国境をも越える関係を築き上げたいです。架け橋になります。後藤さんからいただいたまごころを大事にあたため、いつか後藤さんの話を、イタリアから繋か、た話をゲストにしようと思います。

最後に、お世話にな、た後藤さんに感謝の気持ちを込めてこう言いたいです。どうもありがとうございました、行、てきます。そして二十歳にな、たら一緒に日本酒お付き合ってください。